

令和 3 年 6 月 27 日現在

機関番号：34516

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18H01064

研究課題名（和文）黎明期を迎える幼児教育でのタブレット端末活用に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Utilization of Tablet Terminals in Early Childhood Education

研究代表者

堀田 博史（Hotta, Hiroshi）

園田学園女子大学・人間教育学部・教授

研究者番号：60300349

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,400,000円

研究成果の概要（和文）：保育でのタブレット端末活用事例を質問紙調査で収集し、その後訪問調査を実施、その結果をもとに幼児教育でのタブレット端末活用ハンドブックを作成した。そこには、自閉症児へのコミュニケーションアプリの使用の試みも掲載している。また、保育現場だけではなく、家庭で保護者と一緒に子供のタブレット端末活用指針が作成できるワークショップを開発した。大学の保育者養成課程の授業シラバスを収集し、メディア活用状況を把握、タブレット端末で活用できるカリキュラム提案をした。そして、保育活動の可視化を実現するため、子供の活動記録をクラウド保存し、その課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児教育でのICT活用に関する研究が大きく遅れており、以下のような研究課題の解決が急がれた。保育でのタブレット端末活用の事例共有。保護者支援に親の情報リテラシー向上を追加する。保育活動を写真や動画で可視化し蓄積する。発達障害を有する幼児のタブレット端末活用の知見を蓄積する。非認知的能力の育成にタブレット端末活用がどのように効果があるのか検証をはじめめる。教職課程コアカリキュラムに幼児教育でのICT活用を網羅する。

本研究成果を幼児教育分野に反映させることで、教育を受ける子供達が、将来情報を正しく積極的に活用できるようになり、多様な分野で活躍する人材を育成することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：We conducted a questionnaire survey to collect examples of tablet device utilization in childcare. After that, I visited multiple gardens and created a handbook for utilizing tablet terminals in early childhood education. It also includes the results of using the communication app for children with disabilities.

We have developed a workshop where children can create guidelines for using tablet devices at home with their parents. We collected syllabuses from the university's childcare training course and grasped the status of media utilization. We proposed a curriculum that can be used on tablet devices. In addition, in order to visualize childcare activities, children's activity records were saved on a cloud server and issues were shared.

研究分野：幼児教育

キーワード：幼児教育 ICT活用 タブレット端末 発達障害 保育者養成課程

1. 研究開始当初の背景

「幼児教育の重要性」が増大する中で、当該分野がこれまでの古典的保育思想から、現代的な科学社会の優位な点を取り入れた教育転換に大きく遅れていることが、学術的な問いの核心にある。幼児教育の質的転換のひとつが、保育活動や園務、保護者支援で発生するデータを情報ネットワークにより有機的に連携させることであり、それを実現するツールが「タブレット端末」と考えられる。

そこで、研究の方法で示すいくつかの課題を解決し、その内容を、科学的な知見を通じて幼児教育分野に反映させることで、教育を受ける子ども達が、将来情報を正しく積極的に活用できるようになり、多様な分野で活躍する人材を育成することが期待できる点で、幼児教育への学術的貢献に寄与すると考える。

2. 研究の目的

本研究では、いくつかの課題を解決するために、まずインタラクティブな操作が可能なタブレット端末が、保育における幼児の直接体験や創造的な活動を強化する活用法を収集し、成功体験と失敗体験の共通点を明らかにすることで、保育の質向上に繋げることを第一の目的とする。明らかになった研究知見をさらに、幼稚園教育要領の全面実施を2018年度に控えた新しい時代の学びの過程を展開するために、タブレット端末活用における、①保護者の情報リテラシー向上、②園務の情報化における課題解決、③発達障害を有する幼児の活用における留意事項の整理、④幼児の非認知能力の育成検証、⑤保育者養成課程を設置する大学でのカリキュラム内容の提案を通じて、幼児教育や教育学、心理学や医学の専門家と共に、幼児教育全般に広げることが第二の目的である。

3. 研究の方法

<調査1>全国に散在する保育でのタブレット端末活用事例の収集と評価

保育でのタブレット端末活用事例が集約されておらず、その効果や課題が共有されていない。そこで全国の幼稚園を無作為に1,000園抽出し、郵送によりタブレット端末活用状況を聞き取る。さらに、複数のタブレット端末活用園を訪問調査し、その活用状況を収集する。総合的に成功・失敗体験の共通点を整理した後、協力園において保育にタブレット端末を一定期間設置し、保育の質向上に繋がる保育方法を検討・提案する。

<開発1>家庭でのタブレット端末活用指針作成のためのワークショップの開発

家庭における幼児のタブレット端末活用において、医学的な留意点、教育的効果や情報社会でのトラブルなどを知識理解できるワークショップを開発する。まず保護者による質問紙調査等で、求められる情報リテラシー項目を収集する。その後、求められる情報リテラシー項目を網羅したワークショップを試行、評価する。保護者自身が、家庭でのタブレット端末活用指針を作成できるワークショップをパッケージ化する。

<開発2>保育活動の可視化を実現するeポートフォリオの開発

従来取得してこなかった保育活動の写真や動画、子ども個々の独り言や呟きの音声を記録・蓄積するeポートフォリオの開発を目指す。協力園にネットワークを構築し、タブレット端末で撮影したデータを蓄積・共有できるシステム(A)を設計する。同時にAI搭載ロボットの開発企業と協同し、幼児がロボットに呟く内容をデジタル化して蓄積できるシステム(B)を設計する。協力園でシステム(A)・(B)を活用し、保育者への半構造化インタビューにより評価を行う。

<開発3>発達障害のある幼児のタブレット端末活用ハンドブックの開発

発達障害のある幼児が、タブレット端末での遊びに興味を持ち、集中する実践報告は存在するが、どのような期待できる効果と留意点があるのかが明らかではない。そこで、発達障害のある幼児の家庭にタブレット端末(アプリ含む)を設置し、どのような遊び方をするのか調査する。その結果を期待できる効果と留意点として整理し、ハンドブックを作成する。全国の幼稚園にハンドブックを配布し、その評価を行う。

<開発4>非認知的能力の育成を促すタブレット端末活用法の提案

どのような保育活動が非認知的能力の育成に影響するかの研究知見は数少ない。ICT活用での遊びに限定すると皆無に等しい。まず質問紙調査などを交え、保育者にどのような保育活動が非認知的能力を育む可能性があるかを明らかにする。そして質問紙調査により、協力園に非認知的能力育成の可能性のあるタブレット端末を活用した保育活動を提案して評価を得る。

<開発5>保育者養成課程での保育でのタブレット端末活用教材の開発

幼稚園教諭免許状取得に必要な科目「保育内容の指導法」や「教育の方法・技術」には、視聴覚教材等で、日頃の幼稚園生活では体験することが難しい内容を補完する場合等の活用法を示すことが求められている。そこで、大学のシラバスを収集し、どのように視聴覚教材等が活用されているか調査する。さらに、カリキュラム内容の提案とそれを実現する教材群を作成して、保育者養成課程で試行し、受講生への質問紙調査等で評価する。

4. 研究成果

<調査1>全国に散在する保育でのタブレット端末活用事例の収集と評価

引用文献①

2018年7月初旬から8月中旬までの回答期間で、全国1,000園に調査を依頼、280園より返信を得た。事例集に掲載された10の活用場面、14の遊びを対象に、「1:非常に取り組みたい」から「5:全く取り組みたくない」の5段階で評価を得た。なお、評価は逆転項目で処理した。結果、平均値3.0以上は、以下の4項目であった。()は事例集掲載頁、(*.*)は平均を示す。

(5) B 個別の遊び/B1 個に応じる遊び (3.2) 七夕の星座を見てみよう！

(6) B 個別の遊び/B2 調査活動 (3.0) 園のおすすめ図鑑をつくろう！

(7) B 個別の遊び/B2 調査活動 (3.0) 世界の「こんにちは」を知り、交流遊びをしよう！

(10) B 個別の遊び/B5 家庭とのつながり (3.1) 子どもの活動を伝えてみよう！

14の遊びの場面に関して、一元配置の分散分析を行い、有意差($F(13, 3698)=6.53, p<.01$)が見られたので、多重比較を行った結果、上記(5)と(10)が他の多くの遊びの場面との間で有意な差が見られた。(5)「七夕の星座を見てみよう！」は、タブレット端末で手軽に実現できるインターネット活用である。また、(10)「子どもの活動を伝えてみよう！」は、タブレット端末の可動性と画面の大きさ、見やすさを活かした園と保護者を繋ぐ取り組みである。

<開発1>家庭でのタブレット端末活用指針作成のためのワークショップの開発

引用文献②

(1)質問紙調査結果より、保護者がデジタルデバイスに対して持つネガティブなイメージは頑健である(それにより、日本でのデジタルデバイス使用が進まない現状がある?)。しかしながら、メディアリテラシーが高い層(ここではPC利用層)では、一部のリスク(危険サイトへのアクセス)を低く見積もる傾向がある(自分がコントロールできている自信が根底にある?)。それゆえ、他の側面についても、親自身のメディアリテラシーを高めることでネガティブ意識を軽減し、ポジティブ面を見据えた積極的使用を促せる可能性がある。その方が、現在の回避的な使用(親が楽をするためにたまに見せるができれば見せたくないというような利用方法)に比べて、より良い子どもの発達につながるはずである。

(2)ワークショップの開発

時程は、10分:趣旨説明 → 20分:情報リテラシーの説明 → 30分:グループディスカッション → 10分:きみもタイムマスターアプリの説明 → 15分:デジタルメディア活用指針の作成 → 15分:参加者で共有 → 20分:ご家庭での実践計画の作成 で構成した。パッケージは、「計66頁からなる「デジタルの活用方法を考えるワークショップ」冊子」「家庭での活用指針作成ワークシート」「質問紙」「家庭での実践計画の作成ワークシート」で構成した。

以下は、ある家庭での活用指針作成ワークシートの内容である。

<提言メモ>「時間」を意識できるようにする。

<活用指針>1日の中で何をするのか、時間はみんな同じ1日24時間もある?しかない?有効に使えるよう、一緒に考える。アプリ等を見るのではなく、進研ゼミのチャレンジパットが今は好きなので、チャレンジを時間を決めてする。その後、決めたことをする流れで活用しました。<きみのルール>決めたことを最後までやりとげる。時間を守る。次にすることを意識する。

このようにワークショップを通じて、各家庭でのデジタルメディアの活用ルールや指針が明確になり、保護者と子供の留意すべき点を再確認できる。

<開発2>保育活動の可視化を実現するeポートフォリオの開発

引用文献③

(1)ロボットを保育に組み込むことの効果を評価した。結果、幼児期のAI教育の3つの条件が観察された。1. プレイタイム中に子供たちがロボットと自由に対話した。2. ロボットの子供たちの印象を評価した。3. ロボットとの関係が毎日のプログラムに組み込まれた。データは、これら3つの条件下でのインタラクティブなイベントと保育者へのインタビューから収集された。テキストマイニングアプローチを使用して、発話と応答を分析し、さまざまな時点での単語の頻度を特定し、インタビューでの教師のコメントに基づく実験方法を適用して、反応の傾向、行動、および感情を評価した。3つの条件すべてで、子供たちはロボットとの相互作用を探求し始め、それに応じて自分自身を調整しようとしたことがわかった。子供たちはロボットが人間とは違うことを理解していたが、コミュニケーションができ、意志があると感じていた。また、ロボットとの対話中の子供の行動には、アニミズム的な特徴があることも確認された。ロボットの機能を使用して、保育者は子供たちのやる気を引き出し、ロボットとの相互作用を促進しようとした。(2)保育現場におけるネットワーク機器の導入事例について複数の園へのヒアリングを実施した。その中の代表的な取組として、大容量NASの導入による保育記録の効率化に関する実践と評価を実施した。対象園に約6ヵ月の使用状況や評価についてヒアリングした。対象園では、ラーニングストーリーの実践に力を入れており、写真等の記録の整理が課題となっていた。導入の所感としては、職員には新しい機材に対する抵抗感はなく、容量を気にせず記録を取ることが可能になり、特に動画の記録が増えたとのことである。それらを活用した研修も実施している。導入の効果としては、写真を保管、整理が可能になり、保育の振り返りや情報共有が容易になったこと、また記録負担が減った分保育活動に集中できるようになったとのことである。このように、機器の導入は保育に新たな視点を与えること、そして業務の効率化による保育の質向上の可能性が

窺われた。他方で、留意点としては、大量のデータから情報を選び取るセンスが問われることが挙げられ、機器の使用だけでなく保育の捉え方にも新たなスキルが求められることが窺われた。

＜開発 3＞発達障害のある幼児のタブレット端末活用ハンドブックの開発

引用文献④

(1) タブレットにダウンロードしたインタラクティブなコミュニケーションツール(Voice4U)を、言語によるコミュニケーションができない年少(5歳～9歳)の自閉症児4名に試用した。対象児にアプリになれてもらう初期のステージから始め、親子の双方向の意志交換をするより高度なステージに移行するように設定したところ、全員で親子双方向の意思疎通の向上が認められた。従来の絵カード(PECS)や音声出力コミュニケーションツール(VOCA)に比較して、携帯性、操作性が優れているタブレットを介した本アプリの有用性が確認された。

(2) 「障害のある幼児のメディア活用～自閉症児へのコミュニケーションアプリの試み～」と題して、幼児教育でのタブレット端末活用も含め、ハンドブックを開発、そして評価を行った。以下で公開している。

<http://hotta-lab.info/kids/handbook20200727.pdf>

＜開発 4＞非認知的能力の育成を促すタブレット端末活用法の提案

(1) 先行研究^{*1}の5つの社会情動的なスキルをもとに、下記の10項目を抽出し、上記＜調査1＞の質問紙調査で、園の生活で非認知的能力に当てはまる内容について問い、その結果に重みを付けて並べ替えたものが以下である。^{*1} パネルディスカッション:国際調査から見る「社会情動的スキル」と親子のかかわり

<https://www.blog.crn.or.jp/lab/10/21.html> より引用

質問項目	重み付けした得点
(ア) 新しいことに好奇心をもてる	944
(イ)好きなことに集中して遊べる	913
(ウ)遊びなどで友だちと協力することができる	861
(オ)自分が何をしたいかを言える	806
(エ)人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる	802
(カ)ほしいもの、してほしいことを大人に頼める	795
(ケ)物事をあきらめずに、挑戦することができる	791
(キ)人の話が終わるまで静かに聞ける	774
(コ)どんなことに対しても、自信をもって取り組める	764
(ク)自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる	749

(2)＜開発 3＞で開発した「幼児教育でのタブレット端末活用」ハンドブックでは、以下の各活動に「学びに向かう力」の観点を付加しており、それも含めハンドブックの評価を願った。各活動に取り組んでみたいと考えた度合(4段階)をもとに、どのような保育でのICT活用が非認知的能力の育成に適しているか、上位の回答をもとに探る。

2.6 ②新しく友達がやってきた！それはロボット

2.5 ⑫園での子どもの活動写真による親子のデジタルストーリーテリング制作活動

2.5 ⑬お絵描きアプリでクリスマスカードを作成

②では子供たちの主体的な関わりを目指す、⑫では諦めずに目標向かって友達と協力する、⑬では達成感を味わうこと、である。このように、活動にICTが活用されることで、子供の遊びに変化が生じる。そこには、子供たちが探究できる問いがあり、友達との協働があり、そしてICTが動画や写真を記録・共有するツールとして存在していることがわかる。

(3)「Society5.0 令和の保育シンポジウム」(実践女子大学2020年度研究成果公開促進費で開催)の中に、2019年度の質問紙調査結果「保育者が重要視する非認知能力」を掲載している。

<https://komayamedialab-digitalbook.meclib.jp/reiwohoikusymposium/book>

＜開発 5＞保育者養成課程での保育でのタブレット端末活用教材の開発

引用文献⑤

(1)全国の保育者養成課程を持つ大学・短期大学のうち、教職課程コアカリキュラムに対応したシラバスを作成中もしくは作成済みの大学・短期大学で開講予定の「教育の方法・技術(情報機器及び教材の活用を含む。)」及び「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」に該当する授業科目のシラバスを99校から提供を得た。その内容を検討し、保育者養成校で行われている保育とメディアに関する5領域の特徴的な授業内容を以下のとおりまとめた。

領域：健康では、運動あそびでのICT活用、食育でのICT活用、基本的な生活習慣を身につけるためのICT活用。領域：人間関係では、事例DVD教材の活用：子どもの人とのかかわりの発達。領域：環境では、動植物などの自然環境の撮影でのICT活用、自然などのマップ作成でのICT活用、文字・数字・図形等への興味や関心を高めるあそびでのICT活用。領域：言葉では、デジタル絵本・紙芝居の製作や紙との比較、児童文化財としてのICT機器、事例DVD教材の活用：子どもの言葉の発達。領域：表現では、e-ポートフォリオ、ICTを活用したドキュメンテーションの作成、表現活動や製作物を記録・録音するためのICT活用及び発表、振り返りでのICT活用、CD

を含む音楽素材としての ICT 活用、著作権について学ぶ際の ICT 活用、事例 DVD 教材の活用：基礎技術や指導法の実際。

(2) 引用文献⑥

以下の表は、保育内容の指導方法と保育の構想について、情報機器の取り扱いについての記述を整理したものである。

	到達目標	授業モデル・留意点
健康	領域「健康」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。	模擬保育においては、教材及び音楽再生機器等の効果的な活用を検討したり、振り返りの際に ICT を活用し視覚化したりなどしながら、学生同士が意見を交換する等、協議する機会を設ける。
人間関係	領域「人間関係」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した教材の効果的な活用法を理解し、保育構想に活用することができる。また、情報機器について、幼児の体験との関連を考慮しながら活用するなど留意点を理解している。	指導案作成や模擬保育では、必要に応じて ICT の活用を試みる。
環境	領域「環境」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。指導案作成や模擬保育では、効果的な形式や提示の方法の工夫として ICT の活用を試みる	領域「環境」に関わる視聴覚教材などの ICT や実践の具体例を示す資料を活用し、具体的な活動のあり方を理解できるようにする。
言葉	領域「言葉」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。	
表現	領域「表現」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。	ドキュメンテーションやポートフォリオ等、ICT を活用した指導計画や学修記録、幼児にわかりやすい教材や提示資料(アイディアや活動の記録)等の資料作成を行う機会を設ける。

コアカリキュラムやモデルカリキュラムで示された内容を、幼稚園教育実習指導における模擬保育と保育内容総論における保育の構想で実践した。

ドキュメンテーションの作成では、幼稚園教育実習指導において、模擬保育を5回実施し、保育者役の学生一人と観察者役の学生2人の3人を1グループとして、観察者がデジカメで撮影するなどして記録をとり、模擬保育終了後に映像等を見ながらグループでリフレクションを行った後にミニドキュメンテーションを作成して全員で共有することを繰り返した。模擬保育での子ども役の学生の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を投げ所に、保育のねらいがどのような姿として実現できたかをディスカッションしてみとったことを、写真等を活用して視覚的にわかりやすく作成するように指導した。デジカメで撮影した写真データをSDカード等からPCに取り込み、使用する写真を選ぶ際にも、模擬保育のねらいが何であったかを再確認しながら話しあう姿が見られ、俯瞰的に保育を振り返る重要性を学ぶことができたという感想を述べた学生が多かった。

ICTを活用した保育の構想では、保育内容総論において、NHKキッズ等の放送教育につながるコンテンツを実際に学生が経験し、保育でどのように活用できるかを構想、模擬保育を行った。実践前は、ICTを活用した保育というと、スマホのアプリ等で子どもがゲームをしたり、知育玩具のように扱うことをイメージしていた学生が多かったが、実践後は、子どもが主体的に情報に関わる大切さに気づき、「幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮する」ことに対する理解が深まったという感想が多く見られた。学生はデジタルネイティブ世代で、日常的に情報機器を扱っているが、それらを保育でどう活かしていくかという視点では操作していない。そこで、講義等のフォーマルな学習環境において、保育環境の一つとして情報機器を捉え直すことは非常に重要だと言える。

<引用文献>

- ① 堀田博史・佐藤朝美・森田健宏、『保育でのタブレット端末活用場面における取り組みやすさの評価』,第25回日本教育メディア学会年次大会,p.106-107,2018年11月
- ② Ayumi SATO, Tomomi SATO, Kosuke SATO, Hiroshi HOTTA, "How do parents handle the advantages and disadvantages of using digital media for toddlers and preschool children? A questionnaire survey.",p131,Poster Session,HICE 18th Annual conference, 2020.Jan
- ③ Tazume, H., Morita, T. & Hotta, H. (2020). Young children's literacy and cognition to interactive AI robots: A multifaceted study of potential enhancement to early childhood education. Proceedings of EdMedia + Innovate Learning, 289-294.
- ④ 榑原洋一・堀田博史,『障害のある幼児のメディア活用～自閉症児へのコミュニケーションアプリの使用の試み～』,チャイルドサイエンスVOL.19, p.33-38, 2020年3月
- ⑤ 松山由美子・中村恵・堀田博史,『幼稚園教諭養成課程における「保育でのICT活用」に関する研究－シラバス調査の結果から－』,日本教育工学会2020年春季全国大会(第36回)2020年3月
- ⑥ 中村恵・松山由美子・堀田博史,『保育におけるICT活用方法の指導モデルの検討』,P-D-7-12,日本保育学会第74回大会,2021.5

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 榊原洋一・堀田博史	4. 巻 VOL.19
2. 論文標題 障害のある幼児のメディア活用～自閉症児へのコミュニケーションアプリの使用の試み～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 チャイルドサイエンス	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tazume, H., Morita, T. & Hotta, H	4. 巻
2. 論文標題 Young children's literacy and cognition to interactive AI robots: A multifaceted study of potential enhancement to early childhood education	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of EdMedia + Innovate Learning 2020	6. 最初と最後の頁 289-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yumiko MATSUYAMA, Megumi NAKAMURA, Hiroshi HOTTA	4. 巻
2. 論文標題 ICT Utilization in Early Childhood Education and Care in Japan's Kindergarten Teacher Training Course: Examination of Classroom Content in "Education Methods/Techniques" and "Childcare Content Overview" Syllabi	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 HICE 19th Annual conference	6. 最初と最後の頁 487-492
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 堀田博史・森田健宏・中村恵・野口聡
2. 発表標題 幼児教育でのメディア活用～エビデンスの重要性～
3. 学会等名 日本保育学会 第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松山由美子・中村恵・堀田博史
2. 発表標題 幼稚園教諭養成課程における「保育でのICT活用」に関する研究 - シラバス調査の結果から -
3. 学会等名 日本教育工学会 2020年春季全国大会(第36回)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ayumi SATO, Tomomi SATO, Kosuke SATO, Hiroshi HOTTA
2. 発表標題 "How do parents handle the advantages and disadvantages of using digital media for toddlers and preschool children? A questionnaire survey."
3. 学会等名 HICE 18th Annual conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tomomi SATO, Ayumi SATO, Hiroshi HOTTA
2. 発表標題 "Development of a Tablet Application to Control Screen Time for Young Children."
3. 学会等名 HICE 18th Annual conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TAZUME Hirotsugu, MORITA Takehiro, HOTTA Hiroshi, HATANAKA Yoshiko
2. 発表標題 "Children talking with "RoBoHoN" : Interaction between preschool children and an AI robot."
3. 学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Hotta, Tomomi Sato, Takehiro Morita
2. 発表標題 "Focus Point of "Attitudes of Learning to Learn" in Early Childhood in Childcare Facilities Which Utilizes Tablet Devices in Childcare"
3. 学会等名 The 20th PECERA Inetrnational Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀田博史・佐藤朝美・森田健宏
2. 発表標題 保育でのタブレット端末活用場面における取り組みやすさの評価
3. 学会等名 第25回日本教育メディア学会年次大会 , p.106-107
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀田博史
2. 発表標題 保育でのタブレット端末活用の可能性
3. 学会等名 CHILD RESEARCH NET (https://www.blog.crn.or.jp/report/02/252.html)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松山由美子・中村恵・佐藤朝美・森田健宏
2. 発表標題 保育におけるICT活用の変遷と課題
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村恵・松山由美子・堀田博史
2. 発表標題 保育におけるICT活用方法の指導モデルの検討
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀田博史・佐藤朝美・中村恵
2. 発表標題 幼児教育でのタブレット端末等の活用
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀田博史・佐藤朝美・森田健宏
2. 発表標題 小学校のICT活用をモデルとした保育での取り組み
3. 学会等名 日本教育メディア学会第27回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田爪 宏二・森田 健宏
2. 発表標題 AIロボットが保育環境に入る時代へ：幼児教育場面におけるインタラクティブAIロボットに対する幼児のリテラシーと認知の特徴
3. 学会等名 チャイルド・リサーチ・ネット https://www.blog.crn.or.jp/lab/01/132.html
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

黎明期を迎える幼児教育でのタブレット端末活用に関する研究
<http://hotta-lab.info/kids/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榊原 洋一 (Sakakihara Youichi) (10143463)	お茶の水女子大学・ ・名誉教授 (12611)	
研究分担者	田爪 宏二 (Tazume Hirotougu) (20310865)	京都教育大学・教育学部・准教授 (14302)	
研究分担者	駒谷 真美 (Komaya Mami) (20413122)	実践女子大学・人間社会学部・教授 (32618)	
研究分担者	森田 健宏 (Morita Takehiro) (30309017)	関西外国語大学・英語キャリア学部・教授 (34418)	
研究分担者	佐藤 朝美 (Satou Tomomi) (70568724)	愛知淑徳大学・人間情報学部・准教授 (33921)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松山 由美子 (Matsuyama Yumiko) (90322619)	四天王寺大学短期大学部・その他部局等・教授 (44422)	
研究分担者	中村 恵 (Nakamura Megumi) (90516452)	畿央大学・教育学部・准教授 (34605)	
研究分担者	佐藤 鮎美 (Satou Ayumi) (90638181)	島根大学・学術研究院人間科学系・講師 (15201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関